

日本史

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	原始～1960年代までの朝鮮（韓国）との関係	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1939年までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
2/4	第1問	原始～近現代の信仰と宗教	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	奈良時代～大正時代までの総合問題（政治・社会・文化・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・外交・社会）	標準
2/5	第1問	古代～戦後までの土地・財政・税制	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1939年までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準

全ての日程で大問4題、小問（総解答数）37問から構成されている。問題数（量）も適切な分量となっており、時間内での解答が可能である。出題範囲は原始・古代から現代（1990年代・2000年代）までの全時代が出題されている。分野としては政治史・通史を中心に、外交、社会経済、文化などが出題され、時代をまたいだテーマ史の出題も見受けられる。出題形式は、全問マークシート方式が採用され、設問形式は文章による正誤判定問題・年代配列・語句選択・組合せ問題となっている。

文章による正誤判定問題が全体の65%前後を占めており、また椋山女学園大学の場合は一つの選択肢の文章量が2～3行とやや長めのため、一見、難問に感じる受験生が多いかもしれない。しかし、設問の多くが、定番で明確な誤りを含んでいるので、冷静に読めば、培った基本知識で正解が出せるように作成されている。史料を含んだ出題も見られるが、出題されている史料は教科書に掲載されている基本・頻出史料なので、普段から「何に関する史料か」を意識しながら学習していれば、正解が出せる。また同大学では、古代から戦後までの文化史の出題も見られる。文化史の出題は必出であるにもかかわらず、文化史に着手しないまま本番を迎えるという受験生も多い。日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点にすぐに反映することのできる科目でもある。入試では、少しでも得点を積み重ねることが大切なので、文化史学習も余裕をもって対応してほしい。

出題内容・レベルは、設問により異なるが、概ね標準的なものになっている。教科書レベルの知識の習得と理解ができていれば十分に合格点がとれる。

日本史

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

●教科書・用語集を用いて知識の吸収と整理

総じて教科書の範囲内からの出題となっているので、まず教科書を読み「どういう出来事があったか」「どのような人物が登場しているか」「どのような政策をしたか」などを確認しよう。そしてそれらを時代ごとにノートにまとめるなどして、オリジナルのテキストを作成しよう。その際に、用語集なども積極的に利用して、知識の充実をはかるようにしよう。

●問題集で実戦感覚を磨く

入試の日本史では、単に知識を吸収するだけではなく、その知識を実際の入試問題で使えるようにしよう。吸収した知識を使える「道具(アイテム・ツール)」にするために、積極的に問題演習を行うとよい。特に椋山女学園大学では正誤判定問題の克服が合格への鍵を握っていることから、標準的な正誤判定問題集を積極的に利用しよう(1冊ではなく、3冊程度がのぞましい)。正誤判定問題への対応は、選択肢の各文を読んで、誤った語句(人物・事項等)が入っていないか、各時代や政策に関するキーワードが入っているかいないかを正確に判断できるかが大切である。また、正誤判定問題は、数多くの問題に触れることで、「どこが狙われやすい」かなど次第にわかるようにもなってくる。普段の学習から「紛らわしい語句」「何年代か(何世紀か)」「結果がどうなったのか」などを意識しながら学習を進めていくことが重要である。また日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点にすぐに反映することのできる科目でもあるので、一問一答集などを常に利用して、知識が離れないようにすることも大切である。

●文化史で点差をつける

政治史・通史を基本とした出題のほかに、近世・近現代の政治史(通史)・文化史の比重が高いのも特徴である。また文化史の学習の際には、「作者・作品」はもちろんのこと、「どの時代の作品なのか」などを意識して学習を進めてほしい。なお文化史は、政治史・通史が終わってから学習するのではなく、鎌倉時代の政治史・通史が終わったら、鎌倉文化の学習というように、政治史・通史と連動させた方がよい。

●年代配列で点差をつける

出題量は少ないが、年代配列の問題が出題される(1問または2問)。年代配列問題は、「知っている年代を基準に前後を特定する」「何世紀の前半・中頃・後半か」「何時代か」「為政者が誰の時か」を特定することで正解が導ける。決して正確な年代を知っていないと解けないという問題ではない。年代配列の学習は、正誤判定問題にも関連・直結しているので、問題集(センター試験の過去問など)を利用してさらに実力を磨いていこう。

最後に、同大学の過去問にもあたって、万全の体制でのぞんでほしい。しっかりとした理解と知識を積み重ね、自信と実力を身につけて、ぜひ合格を勝ち取ってもらいたい。